

天皇と民主主義

―明治維新と戦後民主主義の「構造」の同一性―

橋爪 大三郎



天皇は、日本にしかない。
 天皇は、血統によってその地位を継承する、王権の一種であるけれども、どうもあつうの王権と違っている。どこが違っているかという点、三点ほど考えられる。

第一に、万世一系（皇統連続）と称して、切れ目なく続いていること。

第二に、天皇という、皇帝とも何ともつかない奇妙な名前を持っていること。

第三に、ごく最近まで、人間なのか神なのかよくわからない存在（現人神）だったこと。

これらを順に考えていこう。

まず、万世一系だが、西欧の王様でも中国の皇帝でも、王朝というものがあった、ときどき血統が途絶えてしまう。そうすると、つぎの王様が選ばれ、別の新しい王朝（家系）が始まることになる。こういうことがしばしば起こるものだが、天皇の場合には一度もなかった。

これは不思議なこと、よほど、天皇を存続させたいという社会的な力が働いていたに違いない。ひとつは、天皇に誰でも（と言おうと言いつつ）が、なんとなく血がつながって（い）なれること。もうひとつは、天皇家を断絶させても、誰も得をしないこと。この二つの条件があつて、天皇は永続しえた。

これは、日本人の王様に対する考え方がきわめて特殊であることをあらわしている。天皇とは何か。古事記、日本書紀などによれば、神の子孫だといふ。だから偉い。だがそこには、日本人はみな神の子孫だとも書いてあり、天皇とあつうの人民は血のつながった親戚ということになる。しかも、日本人は死んだら神になると思っているから、神／天皇／人民のあいだに、はつきり線が引けない。（これに対してヨーロッパの○○は、日本の神と大変違っている。そもそも○○を「神」と訳したのが誤りの元だった。）

ミニチュアを作り、律令や仏教など中国の制度・文物を輸入した。

それは完全に中国風になったかという点、そうではなく、いつの間にか日本風に変質してしまう。そして明治になると、今度はヨーロッパの真似を始めた。天皇はエンペラーだ、ということになってしまった。

こういう天皇を戴くことで、日本人は自分たちが日本人であることを確認しているのである。外国では、異民族が攻めてきて王様になるといふことがよくあるが、日本人はそういう経験が全然ない。

二番目に、天皇という名前。もとはスメラミコという名前だったのが、いつから天皇になったのか。

外国に優れたものがあつた場合、それをコピーして、何としても日本の文化水準をそこまで引き上げる。そういう運動のリーダーとして、人民の文化的生活に責任を持つてるのが天皇なのだ。

三番目の、天皇が神みたいな存在でもあるというのは、西歐化（文明開化）の動きにパンチを利かせるため、明治政府の元老たちが考えた宣伝文句だった。天皇が中国の皇帝みたいな政治権力者でなくて、おまじないみたいなことをやっている原始的な性格を残していたのも、ち

三番目の、天皇が神みたいな存在でもあるというのは、西歐化（文明開化）の動きにパンチを利かせるため、明治政府の元老たちが考えた宣伝文句だった。天皇が中国の皇帝みたいな政治権力者でなくて、おまじないみたいなことをやっている原始的な性格を残していたのも、ち

三番目の、天皇が神みたいな存在でもあるというのは、西歐化（文明開化）の動きにパンチを利かせるため、明治政府の元老たちが考えた宣伝文句だった。天皇が中国の皇帝みたいな政治権力者でなくて、おまじないみたいなことをやっている原始的な性格を残していたのも、ち

ようによかつた。こういう、二千年も昔の土着の王様が、だから現代社会にまで生きのびているというの、世界的に見て珍しい。

つぎに、民主主義とは何かについて、おさらいしておこう。

新憲法の柱は、言うまでもなく民主主義。民主主義と言つてもいろいろあるけれど、ここではもちろん近代デモクラシーという意味である。

民主主義とは何か？ ズバリこれは、「法の支配」の特別な場合である。

そこでまず、法の支配について説明すると、専制政治や単なる共同体と違って、人間と人間の関係を法によってコントロールしようという考え方だ。人びとの間にトランプルが生じたら、必ず法に照らして解決する。これが法の支配で、人間よりも法が上にあるわけだ。

法の支配は、近代社会を作るのに絶対必要な工夫である。このことよつて、市民一人ひとりが自由と、権利と、財産の保障をうける。近代的な市民として、安心してふるまうことができるわけだ。

つぎに民主主義が、ただの法の支配とどう違うかと

正統性。そもそも、この民主主義というシステムは、どうして存在するようになったのか。どうしてほかの制度でなく、この制度がスタートしたのだろうか。

この始まり方には、二つしかない。

ひとつは、ある日突然始まった、というスタートの仕方。憲法そのものはただの字を書いた紙切れにすぎないが、それを民衆が、自分たちの憲法にしようと言いはじめ、実際にそうしてしまつた。これは、革命と呼ばれる。革命そのものは、法の支配でも、もちろん民主主義でもない。血が流れるかどうかは別として、とにかく暴力的なのだ。それによつて民主主義が支えられるというのは、バラドックスだが、まあやむをえない。

つぎに、もうひとつの可能性は、伝統によつてスタートするケース。伝統と民主主義もやはり無関係なのだが、やむをえない。

民主主義でない政治の伝統と言へば、まず王権である。王様が人民を支配していたんだけど、いつの間にか、王制の反対物である民主主義に移行してしまつた。奇妙なことだが、実際にそういうことがありうるのだ。イギリスの例で考えてみると、王のほかに貴族がいた。貴族には貴族の都合があるので、王をコントロールしよ

うと、この法そのものを自分たちで作ら出るところが違ふ。自分たちで作つた法でなければ、法とは認めないのである。法の支配を受けている当の市民たちが、その法を作り変えるというコントロールの手段を持っている。そのループが完成したとき、民主主義も完成する。

法を作り出すところは議会だから、民主主義にとつてまず議会は不可欠。法を生み出すのが、議会の最も大切な活動である。

法にもいろいろあるが、なかでも、政治制度全体の枠組みを決める法、すなわち憲法がいちばん大切である。その憲法のなかに天皇が位置づいているのが、日本国憲法の特徴だ。

問題は、民主主義をこのように考えるなら、それは天皇となんの関係もないことである。実際、天皇のない民主主義は世界中にいっぱいある。いや、逆に言うべきで、天皇のある民主主義は日本にしかないのである。どうして、何の関係もないはずの天皇と民主主義が、セットになつてくるのか。読者のみなさんは、ここをどう考えますか？

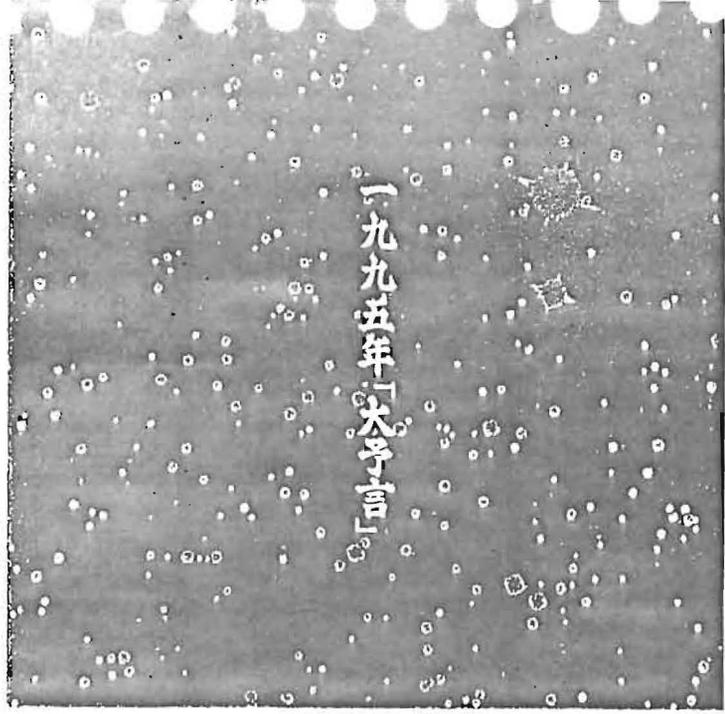
結論を言うと、民主主義にとつていちばんの問題は、

うとする。一人ではやられてしまうので、束になつて議を作る。そうしているうち、議会のルールや法律ができあがる。その結果、王が偉いのか、それとも法律のほうが権威があるのかでもめることになるが、とうとう、法律のほうが権威があるので王も法に従え、となつた時点で、法の支配が確立する。さらに、王が立法権を取り上げられ、拒否権もなくなつて、議会がつくつた法律は全部認めなければならなくなる。こうなれば、立憲君主制とか、民主主義とか呼んでもいいだろう。イギリスはこんな具合に、何百年もかかつて民主主義への道歩んだ。

日本の民主主義は、よく考えてみると第二のケース。伝統による民主主義の正統化、といったやり方だと言へる。

日本は一度も革命がなかつた。現在の新憲法は、旧憲法の改正で出来あがつているし、旧憲法は、専制君主（憲法なしの支配者）だった明治天皇が、人民のためにブレゼントしたというかたちを取つていて、そして、その天皇は、大昔から日本の支配者だつたというのだから、どう考えても、大昔から続いている伝統的な権威が憲法を作り出した、というかたちになつていて、これで、正

1794-21
1994-21



一九九五年「太子言」

る。日本人は、自分の頭で考えて体制を選択する代わり
に、いつも天皇の真似をしてすませる癖がついている。
先ほど「日本社会の永続性に対する信頼」とのべたのは
言いかえればこういうことである。日本人が理解する
「象徴」とは、こういった思考の簡略化装置（集合的無
責任）のことなのだ。

このような天皇を象徴として抱えこんだ日本の民主主
義が、十分に機能するはずがないのは明らかだ。「自衛」
のような、欧米では考えられない現象が起きるのも、日
本の特徴である。日本の民主主義が少しおかしいとい
点については、アメリカもヨーロッパもとくに気が付
いている。

天皇も、自分たちとまったく同じ人間である。ただ天
皇という職務を担っているだけだ。——こう冷静で現実
的に考えることができるかどうかで、日本の民主主義の
成熟の度合いを測ることができよう。日本社会の国際化
は、日本人の天皇に対する態度のなかにこそ、その鍵が
あるのだ。

（本稿は「THIS IS 読売」に掲載予定だったが、
没原稿となり、急ぎよ本誌に掲載することとなった。）
（はしづめ だいさぶろう・東京工業大学助教授・社会学）

念仏者・地方短信①

当南子地域は、幕末期における勤皇派としての宇和島藩として知られ、戦後は、獅子文六、吉村昭、司馬遼太郎、丸谷才一らによって取り上げられ、ユニークな地域として、かなり全国的に知られているようだ。

最近では、同じ南子地方に属する内子町出身の大江健三郎のノーベル賞受賞で、この四国西南部はまたクローズアップされてきたようだ。そのこと自体は結構なことだ、観光であれ何であれ、当地方の停滞・過疎を打ち破るキッカケになれば、何でも賛成だ。

しかし、問題の深刻さは実は、このようなことでは間に合わないところにあるのだ。私は、決して地元の人たちの期待や願望に水を差すつもりはない。ましてや、ミカンや真珠の恩恵に浴することの出来る人々を除く、多数派の人々の物質的貧しさや、貧富の格差を問題にしているのでもない（もちろん、これも大事だが）。

私が問題にしているのは、あの種田山頭火が愛し、終の棲家とした伊予の国、一遍の生まれた伊予の国の中でも、地理的あるいは後進性（？）故の人々の人情や自然の良さが失われつつあることにあるのだ。あの敗戦期の焼け跡にみられた活気はどこにも見られず、すべては風化して、形骸化した感はまぬがれない。地方が中央や都会にみられぬ住み良さを保持し、過疎化は止められないのみならず、伝統も保持できまい。

私は、この半世紀の体制が地方の人々の内面を破壊しつくしてしまったとおもえる。地方について考えることは、日本について考えることとイコールであることを痛感させられる日々である。（S）

橋爪大三郎

社会学者

去年のしよっぱなな羽田首相、村山首相の誕生を予測できた人はいなかったろう。今年も何が起こるかかわからない。長期トレンドとして言えることだけのべるとしよう。

年末にアメリカの金利が引上げられ、日本はもちろんだドイツを上回る水準となった。アメリカの財政赤字の穴埋めの窮余の策だが、景気の足を引っ張りそう。日米独とも経済はダツチロール状態、ツケの回しあいが続く。

これにひきかえ好調なアジア圏は、次のAPEC総会に台湾の李総統が出席できればさらに弾みがつく。北朝鮮、鄧小平といった爆弾をうまく処理すれば、21世紀までにその実力は倍増しそうだ。また最近、欧米資本のインド投資がブームとなっている。

さっぱりなのが、旧ソ連東欧。遊休設備と失業者が溢れているなら、ケインズ政策による公共投資が有効なはずだが、あいにく設備は超旧式。ないより悪い。第三世界も活気なく、明暗を分けた不均等発展が続きそう。

読書

自分を活かす思想・社会を生きる思想

竹田青嗣・橋爪大三郎著

冷戦構造やグラウンドセオリーが解体したあと、全共闘世代の研究者からポストモダンに代わる新しい思想のパラダイムが提出された。それら中堅思想家のうち一方を代表する両著者が、国家・教育・宗教といった個人と社会にかかわる問題について対論を行い、三年の歳月をかけてとりまとめられたのが本書である。とくに竹田氏は在日朝鮮人という被差別の立場を自らの思想の根拠としながら、単なるルサンチマンの表出に陥らず人間の生を肯定的にとらえ、共生の哲学を説くユニークな評論家で、私は哲学思想に不案内ながらかつて氏の説に深い感銘を受けたことがある。一方の橋爪氏はといえば、旧著『現代思想はいま何を考えればよいのか』において従来の社会科学の基本的枠組みをひっくり返してみせた人であることは記憶に新しい。その言説にはもちろん賛否の声がまちまちだが、新しい哲学の登場を感ぜられた。

大衆に「解放」という幻想をふりまき革命を標榜（ひょうぼう）してきたイデオロギーが破綻（はたん）した現在、両氏のような考え方が若い世代から出

国家・教育・宗教…
創造の熱気示す対論

評者・今谷 明

てくることにはある意味で自然で合理的でもあるが、市場原理の優位性・権力ゲームよりエロスゲームといったキーワードは、実は近代西歐で既に指摘された言説に含まれており、むしろ問題はなぜ日本でこうした自然な提言が今声高に叫ばれる必然性があるのか、ということだろう。現に竹田氏も「僕らが、いま言っていることは、十年べらり前だったら右翼反動の言説ですわ」と言う。それだけ戦後日本の思想界でグラウンドセオリーの圧力が大きかったということだろう。

学界や思想界でも長老らによる担任体系が残っている面があり、両氏の共有する新しい基盤が定着するには、いまだ時間が必要かも知れない。ただ思想といふ哲学というも人々の生活実感に根ざしたものと無関係であり得ない以上、古いイデオロギーは確実に安楽死に向かい、新しいパラダイムが若い人々に受け入れられていくだろう。両著者より古い世代の私ながら多く共鳴する点があるのは、別に先見の明あったからでは決してなく、単なる好みの次元にすぎないかも知れぬが、ともかく近ごろ創造の熱気は溢（あふ）れたさわやかな著書だと思つた。

自分を活かす思想
社会を生きる思想

竹田青嗣
橋爪大三郎

（径書房・245円・1,854円）
たけだ・せいじ 47年生まれ。明治学院大教授。はしづめ・だいさぶろう 48年生まれ。東京工業大助教授。